

マザー・グースのうたにおけるナンセンス詩の類型

—はぐらかし型のナンセンス詩—

中 澤 紀 子

0. はじめに

マザー・グースのうた¹の特徴のひとつに、ナンセンス詩が多く含まれるという点がある。「ナンセンス(nonsense)」とは、文字どおりには「無意味な」「意味をなさない」という意味だが、筆者はマザー・グースのうたにおける「ナンセンス」は、「《常識的な/日常的な意味》からはずれた」または「意図的にはずした」ものであると考える²。そして、その「はずれ方」、「はずし方」には、いくつかの特徴的な型があると思われる。

本研究の目的は、マザー・グースのうたにおける「ナンセンス」の技法をいくつかの類型に分け、それぞれの類型に属するナンセンス詩に具体的な考察を与えていくことによって、その中に存在する「ナンセンス」の類縁と差異を観察し、マザー・グースのナンセンス詩の特徴を抽出することである。

¹ 「マザー・グース(Mother Goose)のうた」とは、英国をはじめとする英語圏で伝承されてきた伝統的な詩や童謡のことを指し、ナーサリー・ライム(nursery rhymes)と呼ばれることも多い。

² その意味では、高橋康也(1977: 16)の《ナンセンス》と《ノンセンス》の区別からすると、《ノンセンス》に属するものであるが、本稿では、特にこの区別をせず、一般的な表現として、「ナンセンス詩」と呼ぶことにする。

1. ナンセンス詩の類型

マザー・グースのうたに現れるナンセンス詩を、その《常識的な/日常的な意味》からの「はずれ方」、「はずし方」に関して、仮に次の4つの型に分類することにする。それぞれの型には、マザー・グースのうたの中でそれに当てはまるとされる詩の具体例のいくつかを示す。なお、マザー・グースのうたの個々の詩には題名がないため、詩の1行め（の日本語訳）を題名代わりに示し、必要があればその後ろに補足説明を〔 〕付きで示す。

I. はぐらかし型

（具体例）

- ・丘のふもとに住んでいるおばあさん 〔もしも いなくなっていなければ…〕
- ・ゴータム村の三賢者 〔おわんに乗って海に漕ぎ出した3人の男〕
- ・もしも世界が紙でできていたら

II. 明らかな矛盾型

II-1. 常識をくつがえすパターン

（具体例）

- ・3人の子どもが氷の上をすべっていた 〔夏の日に氷すべり〕
- ・月に住む男は下りてくるのが早すぎて 〔冷たいものでやけど〕

II-2. 言葉遊びを用いたパターン

（具体例）

- ・池が火事で燃えているのを見た 〔家がお辞儀しているのを見た 牧師が…〕
- ・ハバードおばさん 〔家にもどってみたら 死んだは

ずの犬が笑っていた]

III. 重大なことを軽く扱う（物事の軽重の矛盾）型

（具体例）

- ・ある所にとってもだらしのない男がいました [バラバラ殺人事件]

IV. あり得ない状況を設定する非現実型

（具体例）

- ・かごに乗って空を飛ぶおばあさん
- ・靴の中に住むおばあさん

以上、仮に4つの類型とそれに属すると思われる詩の具体例を挙げたが、マザー・グースのナンセンス詩の中には、この類型以外のものもあり、また、一つの詩が2つ以上の類型に当てはまることもある。後者の場合は交差分類が必要と思われるが、それについては、具体的な詩の考察の際に述べることにする。

本稿では、この研究の第1弾として、4つの類型のうち、「I. はぐらかし型」のナンセンス詩について考察していく。

2. はぐらかし型のナンセンス詩

広辞苑によると「はぐらかす」の意味のひとつは、「焦点をはずしていいまぎらす。問題をそらしてごまかす」である。

マザー・グースのナンセンス詩に見られる「はぐらかし」の技法は、「自明のことを言う」「話の展開の期待を裏切る」「話の焦点をずらす」「話題をそらす」などの方法で、聞き手を驚かせたり、楽しませたり、苦笑させたりするものである。

この「はぐらかし」の技法は、言語学的に言えば、グライス(H.P. Grice)

の語用論 (pragmatics) における「協調の原則 (cooperative principle)³」を意図的に破ることによって、特殊な効果をねらったものであると考えられる。

マザー・グースのナンセンス詩が、この「協調の原則」をどのように破っているかを検証するために、「格律 (maxim)」と呼ばれる4つの下位原則を次に示す。

- (1) (i) 量の格律：適切な量の情報を提供すること。
つまり、必要十分な情報を提供し、不必要なことは言わないこと。
- (ii) 質の格律：真実であることだけを言うこと。
つまり、間違っていると思っていることや十分な根拠のないことは言わないこと。
- (iii) 関連性の格律：目下の会話に関連のあることのみを言うこと。
つまり、無関係なことは言わないこと。
- (iv) 様態の格律：明晰な言い方をする事。
つまり、曖昧な言い方を避け、順序立てて、簡潔に言うこと。

以上のことを手がかりにして、マザー・グースのナンセンス詩の具体例を詳しく見ていくことにする。

³ 「協調の原則 (cooperative principle)」とは、Grice (1967; 1975) の用語で、「会話の含意 (conversational implicature)」を説明する際の重要な原則のひとつである。この原則は、会話の当事者が、「情報の伝達」という目的のために規準として知っていなければならないと想定されているもので、普通は無意識に守られている原則である。

Grice (1967; 1975) では、会話における「協調の原則」を、カントの範疇論にちなんで、量 (quantity), 質 (quality), 関連性 (relation), 様態 (manner) の4つの「格律」に下位区分し、さらに必要に応じていくつかの下位原則を設定している。

2.1. 丘のふもとに住んでいるおばあさん

(1) There was an old woman

Lived under a hill,

And if she's not gone

She lives there still.

Opie (1997:519)

おばあさんがひとり

丘のふもとに住んでいました

もしいなくなってしまうとすれば

まだそこに住んでいます

(筆者試訳)

Opie (1997:519)では、このタイプの「おかしさ」を、*Mother Goose's Melody* (c.1765)でゴールドスミスと思われる注釈者がこの詩に添えたコメントの一部を引用して解説している。ここで、*Mother Goose's Melody* (c.1765)の復刻版と思われる *Mother Goose's Melody* (1791)におけるこの詩のテキストと注釈者のコメントを見てみよう。

(2) There was an old woman

Liv'd under a hill,

And if she isn't gone

She lives there still.

This is a self-evident proposition,
which is the very essence of truth.
She lived under the hill, and if she is not
gone she lives there still. No-body will
presume to contradict this.

Mother Goose's Melody (1791:24)

(ただし、下線は筆者による。)

おばあさんがひとり

丘のふもとに住んでいました

もしいなくなってしまうとすれば

まだそこに住んでいます

「おばあさんが丘のふもとに住んでいた。もし
いなくなってしまうとすればまだそこに住んでいる。」
これこそまさに真理の本質であるところの
自明の命題である。誰もこれに異議を唱えは
しないだろう。

(筆者試訳)

Opie (1997:519)に引用されているのは、(2)の中の下線部の注釈者のコメントである。これはまさに、「はぐらかし」の技法のひとつを言い当てている。それは、即ち、「自明のことを言う」という方法である。換言すれば「わかりきったこと」「わざわざ説明する必要のないこと」を大真面目に論理的に説明しようとする態度が「おかしさ」を生むのである。

これは、言語学的に言えば、グライス(H.P. Grice)の「協調の原則」の中の「(i) 量の格律」に違反していることになる。即ち、「不必要なことは言わないこと。」の中には「自明のこと、わかりきったことは言わない。」が含まれると考えられるが、それを意図的に破って堂々と自明のことを述べているのである。

普通の会話では、たとえ「(i) 量の格律」に違反していても、大原則である「協調の原則」が守られているので、聞き手は、話し手が文字通りの意味を意図しているはずがないと推論し、会話の含意(conversational implicature)を算定し、皮肉(irony)や隠喩(metaphor)などを含む「言外の意味」を汲み取ることになる。しかし、(1)(2)のナンセンス詩は、このように皮肉や隠喩として言外の意味を汲み取らせようとする意図はなく、普通の会話の大原則である「協調の原則」自体を破ることを楽しんでいるのである。

高橋康也(1977:182)が、同種のナンセンス⁴として「雨の降る日は天気が悪い」という日本の諺を挙げているが、それはまさに、この種の「自明のことを言う」という「はぐらかし」の技法にぴったり当て

⁴ 高橋康也(1977:16)の用語。そこでは、《ナンセンス》と《ノンセンス》を弁別的に使い、ナンセンスが《意味(センス)のない状態》をさすのに対し、ノンセンスは、《日常的な意味》としての《意味(センス)》を無化し、その空無の中から、別種の新しい《意味》を出現せしめる方法をさす。

ただし、先の註2で述べたように、本稿では「ナンセンス」と「ノンセンス」の用語上の区別をしないで一般的に「ナンセンス」と呼ぶことにしたので、高橋康也(1977)に言及するとき限り、「ナンセンス」と「ノンセンス」を使い分けることにする。

はまる例である。

しかし、(1)(2)のナンセンス詩は、また、別の側面から見ると、「おばあさんがひとり 丘のふもとに住んでいました」という、昔話または物語の始まりを思わせる定番のフレーズの後に、何も物語らしきものが展開せず、唐突に終わってしまうという意味で、もう一つの「はぐらかし」が行われていると言うことができる。この種の「はぐらかし」の技法は、換言すれば、「話の展開の期待をわざと裏切る」あるいは、「物語(narrative)の構造を意図的に崩す」という方法である。

以上の2種の「はぐらかし」の技法が、その他のマザー・グースのナンセンス詩の中でどのように用いられているかを考察していくことにする。

高橋康也(1977)が、マザー・グースに見られる(1)(2)の詩と同系のナンセンス⁴として挙げている詩が、「だれもそばにいないとき／わたしはひとりぼっち」と「上にのぼったときは上にいた／下に降りたときは下にいた／途中にいるときは／上でも下でもなかった」の2つである。それらの原詩を示すと、次の(3)と(4)である。

(3) Here am I,

Little Jumping Joan;

When nobody's with me

I'm all alone.

Opie (1997:295)

まかり出ました わたくしめ
人呼んで(浮気者の)ジャンピング・ジョーン
誰も一緒にいなければ
わたしはひとりでございます

(筆者試訳)

Opie (1997:295-6)の解説および、来住正三 (1988:118-9)によると、この詩に出てくる Jumping Joan というのは、あまり評判の良くない浮気女のことを表わす隠語で、この詩は、もとは無言劇などで、登場人物を紹介するためのもの、あるいは、売春婦が客をとるときの呼び込みの言葉と考えられる。

(3)の詩の3, 4行めの「誰も一緒にいなければ わたしはひとりでございます」の部分は、一見、(1)(2)の詩の「もしいなくなってしまういなければ まだそこに住んでいます」の部分と同じように「自明のことを言う」という「はぐらかし」の技法を用いて「おかしさ」を生み出しているように思われる。

しかし、上で述べたこの詩の解説が事実なら、「誰も一緒にいなければ わたしはひとりでございます」というフレーズは、あまり評判の良くない浮気女の場合なら、「いつも誰か男の人がそばにいる」という「裏の意味」になり得るし、また、売春婦が客をとるときの呼び込みならば、「どうぞわたしのそばに来てください」という哀切の響きを持つ「言外の意味」にもなり得る。

これを言語学的に見てみると、一見、「自明のこと、わかりきったことは言わない。」という、グライス(H.P. Grice)の「協調の原則」の中の「(i) 量の格律」に違反しているだけのように見えるが、(1)(2)の詩の場合と違って、(3)の詩では、普通の会話の場合と同じように、たとえ「(i) 量の格律」に違反していても、大原則である「協調の原則」が守られていると想定され、聞き手は、話し手が文字通りの意味を意図しているはずがないと推論し、会話の含意(conversational implicature)を算定し、上で述べたような「裏の意味」「言外の意味」を汲み取ることになるのである。

さて、次の(4)の詩の場合はどうであろうか。

(4) Oh, the brave old Duke of York,

He had ten thousand men;

He marched them up to the top of the hill,

And he marched them down again.

And when they were up, they were up,

And when they were down, they were down,

And when they were only half-way up,

勇ましいヨークの公爵、

一万の軍勢率いてた。

軍を率いて山のとっぺんに上り、

軍を率いてまた山から下りてきた。

上まで上った時は、みんな上において

下まで下りた時は、みんな下において

途中までしか上らなかつた時は、

They were neither up nor down.

Opie (1997:532-3)

みんな上にも下にもいなかった。

(筆者試訳)

(4)の詩の5行め以降は、(1)(2)の詩の場合と同様に「自明のことを言う」という意味で「はぐらかし」の技法を用いている。もう少し詳しく述べると、どうでもいい事、わかりきった事を、「わざと論理的に」、「過剰に厳密に」述べてみることで、「おかしさ」を生み出している。

しかしここで、(1)(2)の詩の場合と異なるのは、この詩の主人公の「ヨークの公爵」は実在の人物ではないかと思わせる点で、その人物に関して、どうでもいい事、わかりきった事を、「わざと論理的に」、「過剰に厳密に」述べることによって、その人物をからかったり、笑いものにするという「言外の意味」が出てくることである。

この点では、言語学的に言えば、(3)の詩と同様に、グライス(H.P. Grice)の「協調の原則」の中の「(i) 量の格律」に違反してはいても、大原則である「協調の原則」が守られていると想定され、聞き手は、その含意を算定し、皮肉(irony)や隠喩(metaphor)などを含む「言外の意味」を汲み取ることになるのである。

また、別の側面から見ると、冒頭で「勇ましいヨークの公爵、一万の軍勢率いてた。」とあれば、さぞ勇ましい功績が語られると思いきや、大軍勢を率いてただ山に上ったり下りたり、最後には中途半端で終わってしまうという、期待はずれの展開が待っている。これは、(1)(2)のナンセンス詩の場合とも一部共通する「話の展開の期待をわざと裏切る」という「はぐらかし」の技法である。

そして、それは、上で述べた、ある人物に関して、どうでもいい事、わかりきった事を、「わざと論理的に」、「過剰に厳密に」述べることによって、その人物をからかったり、笑いものにするという一種の「はぐらかし」の技法に加えて、さらに「話の展開の期待をわざと裏切る」という別種の「はぐらかし」の技法を重ねることによって、このヨー

クの公爵の無能ぶりをからかうという効果を生んでいる。

2.2. おわんに乗って海に漕ぎ出した3人の男

(5) Three wise men of Gotham,⁵

They went to sea in a bowl,
And if the bowl had been stronger
My song had been longer.
Opie (1997:226-7)

ゴータム村の三賢者

おわんに乗って海に出た

もし おわんがもう少し丈夫だったなら

私の唄ももっと続いていたでしょうに

(筆者試訳)

Opie (1997:227) の解説および、来住正三(1988:190)によると、ゴータム村は、中世の頃から愚か者の村として有名であった。しかし、そのうわさは、ゴータム村の村人が故意に流したものであるという。実は、ジョン王(King John)の時代に、ある時、王がノッティンガムへ行く途中にゴータム村を通ることになったと伝え聞いた村人が、王様が通った道はそれ以降永久に公道とされ通行税が課されるのではないかと、いうことを恐れて、王様が通るのを避けるために、わざと村人全員が愚か者であるふりをして、王様が村を通らないようにすることに成功したというのである。そうすると、愚か者の村として有名なゴータ

⁵ この詩は、3人の男がおわんに乗っているイメージから、下記のように知られた詩との関連性が考えられる。

- (i) Rub a dub dub,
Three men in a tub:
And who do you think they be
The butcher, the baker,
The candlestick-maker;
Turn'em out, knaves all three.
Arthur Rackham, *Mother Goose* (1913:18)

ラバ ダブ ダブ

桶の中の3人男
やつらはいったい何者ぞ
肉屋にパン屋に
燭台屋
追い出せ悪者3人組

(筆者試訳)

(i) の詩の詳しい考察、および(5) の詩とのイメージの喚起性における関連性については、中澤(1993)を参照。

ム村の村人は、本当は「ゴータム村の賢者たち (the wise men of Gotham)」であることになる。

(5)の詩の「ゴータム村の三賢者」という表現は、ゴータム村が愚か者の村として有名であることを知っている人にとっては、詩の1行めから「逆説」あるいは、広義の「パラドクス (paradox)」を含んでいることになる。

一方、上で紹介したような、愚か者の村として有名なゴータム村の村人は、本当は「ゴータム村の賢者たち (the wise men of Gotham)」であるという説を知っている人にとっては、2行めの「おわんに乗って海に出る」という暴挙は、とても賢者の行為とは思えぬ、まさに愚か者の村として有名なゴータム村の村人がやったような行為であるという意味で、逆説のそのまた「逆」である。

これは、また、たとえゴータム村について何も予備知識がなくても、「三賢者」が「おわんに乗って海に出る」という暴挙をするというだけで十分に「逆説」の「おかしさ」が現れているとも言える。

以上のことも、(5)の詩がナンセンス詩であることの一翼を担ってはいるが、(5)の詩がナンセンス詩たる所以は、3行め以降の展開に見られる「はぐらかし」にある。

この種の「はぐらかし」に見事に別種の「はぐらかし」で対抗しているのが、次に示す *Mother Goose's Melody* (1979) におけるテキストと (ゴールドスミスと思われる) 注釈者のコメントである。

(6) Three wise men of Gotham,

They went to sea in a bowl,
And if the bowl had been stronger,
My song had been longer.

It is long enough. Never lament
the loss of what is not worth having.

ゴータム村の三賢者

おわんに乗って海に出た

もし おわんがもう少し丈夫だったなら

私の唄ももっと長く続いていたでしょうに

この長さでじゅうぶん。持つ価値のないものを失ったと嘆くなかれ。

Boyle.

Mother Goose's Melody (1791:21)

(筆者試訳)

(5)・(6)の詩は、「おわんに乗って海に出た3人が、そのあとどうなるのだろう。」という聞き手の期待を裏切って、「もしそのお椀がもう少し丈夫だったら 私の唄ももっと長く続いていたでしょうに」と言ってさっさと話を切りあげてしまう、という「はぐらかし」の技法を使っている。この詩が、子どもが「もっとお話ししてよ。」とせがむとき、「これでもうおしまい。」という意味で使われる、というのいかにナンセンス詩らしい「はぐらかし」の発想である。

このような「話の展開の期待を裏切る」という種類の「はぐらかし」の技法を用いた詩に対して、(6)の注釈者は、この詩全体の内容についてのコメントををすると思わせておいて、この詩が長く続かなかったことだけに焦点を当てて格言じみたコメントをしている。これは、すなわち、(6)の詩の「はぐらかし」に対して、「話の焦点をずらす」「話題をそらす」という別種の「はぐらかし」で対抗することによって、このコメント自体の「おかしさ」を生み出していると考えられる。

2.3. もしも世界が紙でできていたら

(7) If all the world were paper,
 And all the sea were ink,
 If all the trees were bread and cheese,
 What should we have to drink?
 Opie (1997:525)

もしも世界が全部紙だったら
 もしも海が全部インクだったら
 もしも木々が全部パンとチーズだったら
 飲み物は一体何を飲んだらいいんだろう

(筆者試訳)

(7)の詩もまた、「話の展開の期待を裏切る」という種類の「はぐらかし」の技法を用いたナンセンス詩である。もちろん、世界を紙に、海をインクに、木々をパンとチーズにたとえたこと自体もナンセンス

と言えなくもないが、ナンセンスとして際立っているのは、3行めまでは聞き手に仮想の世界、即ち、現実と大きく隔たった想像の世界を描かせておいて、4行めで話の展開の期待をわざと裏切り、(日常生活のありふれた一コマを思い起こさせることによって)急に現実世界に引き戻す、という手法である。その「はぐらかし」の手法によって、この詩はまさにナンセンス詩になっていると考えられる。

別の言い方をすれば、3行めまでは仮想の世界をどんどん繰り広げておきながら、4行めでは、前の行の「パンとチーズだったら」と言う部分だけに焦点を当てて、現実世界の、それもごくありふれた問いである「飲み物は何を飲んだらいいんだろう」と反応している。この「はぐらかし」の技法は、「話の焦点をずらす」あるいは、「話の次元をわざと変える」というふうにとらえ直すこともできる。

3. まとめ (はぐらかし型のナンセンス詩)

本稿では、マザー・グースのうたに見られる「はぐらかし型」のナンセンス詩の具体例として、2.1節では、〈丘のふもとに住んでいるおばあさん〉を代表とする3つの詩を、2.2節では、〈おわんに乗って海に漕ぎ出した3人の男〉の詩を、2.3節では、〈もしも世界が紙でできていたら〉の詩を考察した。

2.1節の〈丘のふもとに住んでいるおばあさん〉では、「自明のことを言う」という一種の「はぐらかし」の技法が用いられていた。言語学的に言えば、普通の会話の大原則である「協調の原則」自体を破ることを楽しんでいる。つまり、「協調の原則」自体を意図的に破って堂々と自明のことを述べていることになる。

また、この詩は、「話の展開の期待をわざと裏切る」あるいは、「物語(narrative)の構造を意図的に崩す」という、もうひとつの「はぐらかし」の技法を重ねて用いていることがわかった。

〈誰も一緒にいなければ わたしはひとり〉も、一見「自明のことを言う」という「はぐらかし」の技法を用いて「おかしさ」を生み出

しているように思われる。しかし、この詩では、「裏の意味」「言外の意味」を汲み取ることができた。言語学的観点から言えば、〈丘のふもとに住んでいるおばあさん〉の場合とは違って、普通の会話の場合と同じように、たとえ「(i) 量の格律」に違反していても、大原則である「協調の原則」が守られていると想定され、聞き手は、会話の含意 (conversational implicature) を計算して、「裏の意味」「言外の意味」を汲み取ることになったのである。

〈勇ましいヨークの公爵〉では、「自明のことを言う」という「はぐらかし」の技法が用いられ、皮肉 (irony) やからかいという「言外の意味」を汲み取ることができた。さらに、「話の展開の期待をわざと裏切る」という、もうひとつの「はぐらかし」の技法を重ねて用いていることがわかった。

2.2 節の〈おわんに乗って海に漕ぎ出した3人の男〉、2.3 節の〈もしも世界が紙でできていたら〉は、共に、「話の展開の期待をわざと裏切る」という「はぐらかし」の技法を用いているが、前者に付けられた (ゴールドスミスと思われる) 注釈者のコメントが、この種の「はぐらかし」に対して「話の焦点をずらす」という別種の「はぐらかし」で対抗している点が興味深い。また、後者の詩の「はぐらかし」の技法は、「話の焦点をずらす」あるいは、「話の次元をわざと変える」というふうに解釈することもできる。

次稿では、マザー・グースのうたのナンセンス詩の類型のうち、本稿で扱えなかった「II. 明らかな矛盾型」をはじめとする残りの型を順次考察していく予定である。

(英米文学科専任教員)

参考文献 ※出版年代順

〈マザー・グース関係〉

Gammer Gurton's Garland or The Nursery Parnassus (R. Christopher), 1784.
Enlarged editions (Christopher and Jennett), c. 1799; (R. Triphook), 1810.

Mother Goose's Melody; or, Sonnets for the Cradle (Francis Power), c.1765 or 1791.

Mother Goose's Melodies, The Only Pure Edition (Munroe & Francis), 1833.

James Orchard Halliwell, *The Nursery Rhymes of England*, 1842. Revised and enlarged, 1843, 1844, 1846, 1853, and c. 1860. *Popular Rhymes and Nursery Tales*, 1849 and c. 1860.

Opie, Iona and Peter (1951) *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, 1st ed., Oxford University Press.

Baring-Gould, William S. and Ceil Baring-Gould (1962) *The Annotated Mother Goose, with an Introduction and Notes*, Bramhall House, New York.

平野敬一 (1972) 『マザー・グースの唄—イギリスの伝承童謡』「中公新書」、中央公論社

高橋康也 (1977) 『ノンセンス大全』晶文社

来往正三 (1988) 『マザー・グースをしてみてください?』南雲堂

藤野紀男 (1989) 『保存版 名作マザーグース 70 選』三友社出版

Mother Goose: Nursery Rhymes, illustrated by Arthur Rackham (London: William Heinemann Ltd., 1989. First published in 1913 by William Heinemann Ltd.)

中澤紀子 (1993) 「伝承文化における語彙とイメージの喚起性—擬声語で始まるマザー・グース」『大東文化大学創立七十周年記念論集 (上巻)』pp. 145-167.

〈言語学関係〉

Grice, H. P. (1967) "Logic and conversation," Ms. of William James Lectures. Harvard University.

Grice, H. P. (1975) "Logic and conversation," Cole, P. & J. L. Morgan (eds.) (1975), *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. New York: Academic Press.